

東方黄金偽獣

ハロルド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黄金にあこがれてあこがれてあこがれて——気がつけばそうになっていた男の話

目次

黄金、現る

1

黄金、現る

彼は憧れた。ただ強く、ひたすらに美しい。『黄金の獣』『愛すべからざる光』とも呼ばれた男、ラインハルト||トリスタン||オイゲン||ハイドリヒに。『Dies ira e』という創作の彼に始まり、少々ながら現実の彼も調べる程度には知識を得。ここまですら単なるファン、または信者の一人でしかない。だが彼は違った。

——狂っていたのだ、その有様が。ただ極端に注がれる愛であり情熱、執着であり依存。それは彼を知ることがなければ死んでいたと豪語する程のモノで、『邪なる聖者』と呼ばれた神父と似て非なるモノだった。

ああなりたい、何故己は彼でないのか。自問自答を繰り返しながらも安寧とした日常を繰り返し、気が付けば冴えない会社員として30の誕生日を迎えようとしていた。

『HAPPY BIRTHDAY俺』

祝ってくれる友人もいなければ恋人もない。家族からは電話の一つが寄越されるに留まり、虚しく侘しいひとりぼっちの誕生日。翌日が休日なこともあつてか、買ったケーキを貪りながら彼は誕生日を迎えた。

瞬きをした刹那、そこは未知だった。

あまりにも自然であつたため、そのままケーキを一口食べてしまつたが、すぐに脳が適応する。ここは異界だ、己は未知に至つたのだ、審判者は来たり。他愛もない戯事を思いながら、自分と共に付いてきたテーブルと椅子を後にして未知の探究を始めようとし――心が打ち震えた。

ケーキを食する際に使用していたナイフに一瞬、この場のない黄金色が映つた。もしや、と逸る心を抑えながらナイフを手にする。生クリームで汚れた刀身を指で拭い、鏡のような刃に顔を映す。

――そこには、己が愛して止まない黄金の姿が在つた。

彼は歓喜し、狂喜した。何故今に至るのか、理屈など興味もないし知りたくもない。彼にとつてはただ己が黄金である事だけが重要で、他の事など知つた事か。ただ蹂躪し、破壊あひしてやろう。そう思いながら、再度歩を進める。

彼は気付かない。己が成つたのが、黄金ハイトリビではなく神父トリフアであると。本質的に差異はないのかもしれないが、彼はやはり気が付かない。